

グロテスク～ Aゴシックすごい

GE Gravenによる



第13章



マウンテンマウス ～ 1351年4月

マウンテンマウスの外では、オーヴェルニュの輝く丘陵がカーテンの下に広がっていた。

星々が輝き、西風は暖かく、強く、そして絶え間なく吹いていた。目的もなくさまよう幽霊のように、渦巻く塵旋風が起伏の多い地形の上空を舞い上がり、急降下した。東の地平線はちらつき、迫り来る嵐の中で稲妻がますます明るく輝いた。空は轟き、遠くの雷鳴が果てしなく続くティンパニのロールのように混ざり合っていた。嵐の前線は巨大で、それは地球の丸みを包み込み、空を飲み込む帯電した毛布のようだった。迫り来る嵐は、稀に見る気候圧力の下で完璧に押しつぶされた回転するスーパーセルであり、それゆえ、緻密に形作られた空の怪物だった。

風向きが変わり、東から冷たく強い風が吹きつけた。輝く枝分かれした稲妻が空に広がり、高貴な嵐の王の巨大な青い血管のようだった。興奮した雲が輝き、前線が刺すような風、目をくらませる歪んだ柱、耳をつんざくような爆発音とともに突進してくると、不気味な緑色に染まった。突然、空が大きく裂け、ガラスの壁のように降り注ぐ雨が降り注いだ。激流が丘の斜面を流れ落ち、多くの場所を水浸しにした。

谷は、おそらくノアだけが知るであろう猛烈な勢いで荒れ狂った。氷の岩が雨のように降り注ぎ、巨岩の上で砕け散り、谷間の水たまりは絶え間なく降り注ぐ雹の下で激しく渦巻いていた。

石の谷の最南端、険しい尾根の上に、閃光のように輝く稲妻を背景に、身長45ハンドもある巨大な騎士のシルエットがそびえ立っていた。漆黒の鎧に身を包んだ巨人は、

巨人は、先端から柄まで人間の身長よりも長い長剣を振りかざした。そして、雲を切り裂くかのような一撃で、巨人は剣を天に向かって突き上げ、まるで多くの巨人が同時に話しているかのような、深く異質な声で叫んだ。「モルス・アド・ヴィタム エルヨ !出てこい！」紫色の閃光とともに、稲妻が剣に激突し、そのシルエットは跡形もなく消え去った。しかし、突風の混乱は続いた。風は強まり、雹が降り、雨が激しく降り注いだ。

かつて人影が立っていた場所に、うねうねと渦巻くサイクロンが天から降りてきて、漆黒の悪夢へと膨れ上がり、雷雨の後壁を北へと這い上がっていった。渦巻く暗闇は、高さ3マイルにも達し、少なくとも4分の1マイルの地面を支配していた。まるで神の指のように、その柱は大地を磨き上げられた線のように削り取り、太い昆虫の触角が地面を嗅ぎ分けるように、稲妻がその怪物から流れ出し、鞭のように打ちつけ、噴出した。

全体的に、鈍重な列はよろめき、ねじれながら、まるで杖をついた老人がふらふらと歩くように、ゆっくりと前進していった。

雨は横向きに降り注いだ。渦巻く巨人が山の口に向かってよろめき進む中、強風が唸りを上げた。岩が尾根を転がり落ちた。柱は頂上を越えて押し寄せた。丘から谷底へと突き進み、山の奥深くへと向かう。そこには、グアノに染まった横たわる彫像が、使い古されたヤギ皮の鞆を胸に抱えていた。それは、グロテスクの石化した残骸、太陽の光によって滅びたエルジョだった。その表情は、凍りついた叫び声を上げたまま口を開け、死んだような目は、震えるコウモリが渦巻く逆さまの海で覆われた洞窟の天井を見つめていた。彼の周りでは、ぼろぼろで汚れたローブが、突撃する戦旗のように、地下の風になびき、はためいていた。

エルジョは死後、おそらく「虚無」の領域とでも言うべき、かなり奇妙な場所に囚われていた。虚無は、人間以外の生き物、つまり神聖な体験に値しない生き物にとって、永遠に空虚な辺境の地だった。コウモリや鳥、蜂が死後行く場所。虚無は創造の埃っぽい屋根裏部屋で、生命の不運な者たちの記憶が散乱していた。おそらくそれは最も高い場所だった。

永遠の空洞、叩き落とされたハエ、網にかかった魚、屠られた子羊にふさわしい場所。虚無の王国は、魂を持たないために永遠の虚無に呪われた生き物たちの、まさに死後の世界だった。エルジョ族が受け継いだのは、この王国だけだった。

しかし、計り知れない速度と猛烈な勢いの風で、竜巻は山腹に激突し、山口は砂、岩、木の破片が渦巻く研磨壁によって徹底的に攻撃され、悲鳴を上げた。破片が山の表面に爆発し、その特徴を削り取り、滑らかにした。上空高くでは、うねる雲の中で何百万もの帯電領域が燃え上がり、つながって集まり、何千もの光り輝く枝が降りてくると同時に、いくつかの太い隣接する稲妻として収束した。それらもまた合体して、天からすべての力を奪い去ったと思われる巨大な柱を形成した。

ドーン！まるで神の怒りの槍のように、輝く水流が大地に激突し、山口の頂上を切り裂き、山の奥深くまで突き抜けるほどの激しさで頂上を吹き飛ばした。洞窟の中では、天井の一部が崩れ落ちた。崩れ落ちる天井から無数のコウモリが降り注ぎ、岩や塵がエルジョ像に降り注ぎ、像の脚を埋め、胸にかけられていた革の鞆を覆い尽くした。轟音を立てる風に煽られ、洞窟内部は沸騰するような混乱状態に陥り、外では巨大な渦がコウモリのほぼ3分の1を洞窟の隠れ家から引きずり出し、虚無の王国へと飲み込んでいった。

旋風は山口からのっそりと離れ、谷から太い足を突き出し、来た黒き空へと昇っていった。最終的に、風は人々が去ると、雨は次第に弱まり、水たまりの上に小雨が降るだけになった。そして混乱が終わると、生き残ったコウモリたちは天井に戻り、洞窟は死神のように静止した。時折、頑固な屋根の石が洞窟の床に降り立つときのカチツという音やくすくすという音がこだまするだけで、その上には叫び声を上げるグロテスクな像が横たわっていた。

しかし、死のような静寂の中、かつて封印されていたフラスコの破片を含むいくつかの品物が入った、使い古された革の鞆の隅から、茶色の液体が流れ出し、ぼろぼろのローブの残骸に細い線を滴らせた。聖別された生命の血は糸を染み込み、像の花崗岩の肋骨を湿らせ、直前の瞬間、パチパチという反響音が暗闇を破り、まるで破裂音のような音が響いた。熱い炭火の中の小石。そして、血が流れ出た場所には、彫像の滑らかな形に亀裂が走り、放射状に広がっていった。

花崗岩の表面には、さらに細い亀裂が走り、まるで微細な黒い稲妻のように繋がり、集積し、その隅々まで覆い尽くした。しかし、パチパチという音は止み、静寂が戻って、エルヨの岩肌はまるで岩のパズルのように佇んでいた。おそらく、無数の不規則に連結された断片の集合体である。

ドーン !像は花崗岩の破片をまき散らしながら爆発し、洞窟中に飛び散った。靴は勢いよく吹き飛ばされ、舞い上がる砂塵の渦の中心で、ざらざらした瓦礫の山の上に裸の肉体が蠢いていた。

「父さん」エルジョはうめき声をあげた。弱々しくかすれた声は、脱水症状で長い間苦しんでいる疲れた男の声のように喘いでいた。エルジョは転がり、湿った砂の塊を吐き出した。おそらく、無数の刺すハチの群れも、目の前の、外見上は全身を覆い尽くすような苦痛に比べれば取るに足らないものだったのだろう。熱にうなされるような震えに圧倒され、それは肉塊のようにうねった。その喘ぎ声と呻き声は、苦痛の叫びとして、逆再生されながらこたました。

癒しの麻痺の中で 外見上は無限に続く時間の流れの中で 耳の中の忌まわしい轟音は、より柔らかく甘い音に取って代わられた。それは、絶え間なく降り注ぐ雨の心地よい響きだった。こうして、復活の痛みは鈍い痛みに変わり、感覚も回復し、部分的に戻ってきたエルヨは、瓦礫が散乱した床をぎこちなく横切り、狭い前方の通路を掃きながら、苦労して前進し、ひび割れて乾いた唇に、尽きることのない新鮮な水の誘惑がある洞窟の入り口へと、ますます近づいていった。

洞窟がなくなった後も、傷つき荒廃した風景の中に堂々とそびえ立つマウンテンマウスは、頂上部分が切り裂かれただけで嵐を生き延びた。傷つき裂けたその岩肌は、かつて岩だらけだった谷を見下ろしていたが、その谷は今や轟音を立てて荒れ狂う川の白波に飲み込まれていた。その谷底から裸の人物が現れた。大きく口を開け、成熟した男性のような筋肉質な体躯 かなり大きな体躯を包み込む、引き締まった塊 を携えて這い出し、水たまりに滑り込み、じっと横たわった。その姿は、かつての修道士イワンに翼が生えた姿に最もよく似ていたと言えるだろう。

ラザロは生きていた。

～*～

こうして、ラザロは復活後数日のうちに癒され、頭がすっきりし、力が回復し、より平凡な雑務をこなすようになった。

存在の。裸であることと、以前よりも大きくなった体格に対応するため、ラザロは食料袋の中に埋もれていた衣服の切れ端を縫い合わせて腰布を作り上げた。その袋は風雨から守られていたのだ。

ラザロにとって幸運だったのかもしれないが、彼はすぐに、飛ぶことは以前と比べて難しくなったわけではないことに気づいた。すべては相対的なものであり、彼の大きな体格は、より広い翼幅によって相殺されたのだ。

空腹に駆り立てられ、彼は夜になると洞窟から出て、山口の裏斜面と隣接する丘の間にある水たまりで獲れたての魚を携えて戻ってきた。

再び洞窟の中に入ると、数シーズンにわたって火が灯っていなかった岩の輪が、今や規則正しくパチパチと音を立てる炎に囲まれ、焼き魚の煙が立ち上り、何百もの黒い小さな目が並ぶ天井の下に長く揺らめく影を落としていた。表面上は、ラザロの体格が大きくなったことと、春の穏やかな気候を除けば、マウンテンマウスで起こっていることは、ラザロが太陽と致命的な遭遇をする以前から何も変わっていないように見えるかもしれない。

コウモリたちがいつものように夕暮れ時に洞窟から飛び出し、夜明け前に満腹になってねぐらに戻ってくるという日常を繰り返すうちに、日々は週へと溶け込んでいった。ラザロもコウモリたちと共に旅立ち、また戻ってきたが、一人で夜空に輝く大地の上空を飛び回り、山の口から遠く離れすぎた場所で、容赦ない太陽の最初の光に捕まらないように常に警戒していた。

その間、彼の食生活は多様化し、空中での狩猟の腕も上達した。モグラ、野ウサギ、時にはキツネまでもが山の口へと持ち帰られた。また、修道士である父がしっかりと頭に刻み込むよう強く勧めた写字室の書物をはじめ、暗記した多くの書物から、彼は獲物から多くのものを得た。燻製や乾燥肉、なめした皮を縫い合わせてズボンや革靴、背中の開いたベストを作り、研いだ骨から粗末な道具まで作った。

これらの多くの技法を用いながら、イワンが長年精神的に容易に利用できるようなしてきたそれらの方法によって、ラザルスは真の規模を理解するようになった。父の尽きることのない愛。彼の首を飾る、使い古された木製の祈りの十字架は、しばしばキスをされ、信仰を強めるだけでなく、父を偲ぶための道具でもあったのかもしれない。そして、それはかつての予測可能な世界と、荒々しく果てしなく広がる世界を結びつける、最後の確かな糸だったのかもしれない。

1351年5月

夜はまだ始まったばかりだった。夕暮れが訪れてからわずか1時間後、ラザロは洞窟の入り口すぐ外の岩壁に寄りかかり、息を切らし汗をかきながら、傍らに横たわる、最新の狩りから持ち帰った成獣のイノシシを見下ろしていた。今回の獲物はこれまでで最大かつ最速の獲物だったが、それには十分な理由があった。彼は十字架にキスをし、死骸を洞窟の中に引きずり込んだ。そこには、彼がずっと前に仕留めた豚の散らばった骨が散乱していた。

殺戮。狩りから戻ってきたコウモリの群れが、キーキーと鳴きながらマウンテンマウスに飛び込み、ラザラスを追い越して洞窟の奥深くへと飛んでいった。ラザラスは振り返り、乾いた笑みを浮かべながらコウモリたちに叫んだ。

「だが、俺のほうが大きいぞ！」彼はイノシシを肩に担ぎ上げ、うめきながらも笑みを浮かべ、バランスを取りながら翼をあちこちに羽ばたかせ、コウモリたちの後をよめきながら追いかけた。

まもなく、長く燃え盛る炎が洞窟に揺らめく影を落とし、イノシシの無精髭に覆われた残骸を照らし出した。イノシシは岩壁にもたれかかり、後ろ足が切り取られ、きれいにされた脚の骨と皮の切れ端が頭部から少し離れたところに散らばっていた。

洞窟の奥深く、中心部に近づくと、ラザロは岩の上に座り、足元には湯気の立つ豚肉のステーキが置かれていた。肉は滑らかな調理面となる熱く平らな岩の上でジュージュと音を立て、豚肉を焼く香りが洞窟中に漂っていた。

「お前は私と一緒にには行かない。お前は旅に出られる状態ではない。だが、それでも私のことを覚えていてほしい」ラザロはそう言いながら、パチパチと音を立てる炎の上に吊した串に刺した肉の塊を焼きながら微笑んだ。「私には守るべき約束がある。そして、必ず守る。本当に明日出発する。見ている」彼は洞窟の天井を見上げ、何百もの黒いつぶらな目で見下ろしているコウモリたちに告げた。空いている方の手で、ラザロは傍らから削り出した骨のナイフを持ち上げ、豚肉のステーキに突き刺し、ひっくり返して再びジュージュと音を立てた。次に、彼は豚肉の串を火から引き抜き、小さく柔らかいなめし革の山から3枚を足元に置いた。

「十分に火を通して乾燥させなければならない」と彼はつぶやきながら、調理済みの豚肉の塊を剥がして皮の上に置いた。ラザロはコウモリとの会話を再開した。

「遠くへ行くぞ！」彼は燻製豚肉を皮と脂で包み、束を縛りながら言った。「大きな海を越えて、イタリアの地へ。サルヴィティーノ修道士と

彼と一緒に修道院に戻り、門石を閉めてもらう。そして門石が閉められたら、私はもう大人になったので、ヴォーニグ修道院長に修道士になりたいと頼むつもりだ。そして、父と同じように私も地下墓地のことなら何でも知っている。修道院長は私を地下墓地の修道士に任命してくれるだろう。」

ラザロは包まれた肉を持って立ち上がり、革紐で縛られたヤギの皮のところへ歩み寄った。

サッチェルは、満杯の水の入った二つの水筒の間に挟まれていた。彼はその中に湯気の立つ包みを積み重ねた。旅に持っていかもしれない追加の食料だ。「そしてミゲル
「それに、タテウスは松明の世話を手伝ってくれるだろう。それに、クロディウス修道士を地下墓地に入れることは絶対に許さない。」彼はくすくす笑いながら鞆を閉じ、火のそばに戻った。

席に戻ると、粗末な骨製のナイフで石の上から豚肉のステーキを剥がし、くすくす笑った。「これは飢えたラザロ修道士にふさわしいご馳走だ。」彼は火の光の中で美味しそうな肉をゆっくりとひっくり返し、こんがりとした焼き色がついたのを確認すると、蒸気を吐き出した。

しかし、天井から大きなグアノの塊が落ちてきてステーキに飛び散り、洗い流した。彼の笑顔が消えた。さらに数匹が彼の周りに飛び散った。コウモリが頭上を飛び交った。「いやだ」と彼はうめいた。彼は立ち上がり、天井に向かって「なぜだ？」と懇願した。すると突然、空気が冷たくなり、自分の息が白く曇るのが見えた。そして、吐き気を催すほど甘い香りがすべてを覆い尽くした。
肉を焼いた匂い。無数のコウモリのつぶらな目が焚き火の光にきらめき、一匹残らず彼をじっと見つめていた。燃える木のパチパチという音やシューという音は、濃密になった空気の中で不自然に小さく響き、炎はまるで花びらが縮んで内側に巻き込み、慌ただしく逆方向に開花していくように見えた。

「私たちは生まれ変わったの？」不自然に調和し、重なり合う声。まるで多くの女性が同時に完璧なタイミングで問いかけているかのような声。が、背後からほとんど聞き取れないほどの小さな声で囁かれた。彼は、それが耳で聞こえたのか、それとも心の中で聞こえたのか、さらに考えなければならなかった。

ラザロはくるりと振り返った。ルシファエルが腕を伸ばした先に立っていたため、ラザロは魂を引き裂かれたように息を吐き出した。ルシファエルは完全に裸で、わずかに笑みを浮かべ、深紅の唇の間から犬のような牙の太い先端を露わにしていた。乱れた髪の下、真っ黒な瞳には洞窟の炎が逆さまに映り、逆さまになった炎が青みがかかった色合いで下向きに踊っていた。さらに、象牙色の肌には黒檀の爪と緋色の乳輪、そして幾重にも重なった肉と骨でできた巨大な翼が彼女の上と後ろに広がっているルシファエルは、その存在だけで純粹さを嘲笑うことができるかもしれない。

ルシファエルは洞窟の向こう側でラザロを叩き、翼をパチンと閉じ、彼の後を追った。ラザロは後ずさりしてよろめき、なんとか立ち上がった。彼は翼を広げてシューッと音を立てながらも、同じように後ずさりして反撃した。彼女は立ち止まり、腕を組み、好奇心旺盛な犬のように胸を突き出し、首をかしげた。そして満足げな笑みを浮かべながら彼をじっと見つめた。

彼女は静かに言った。「あなたは立派に成長したわね。でも、最後に思い出したあなたはただの石ころだったわ。」

「あの像は、愚かなエルジョの少年が、死んだ豚を引きずっている最中に太陽に焼かれて死んだ像よ。まさにあの像と同じね。」彼女は洞窟の向こうにある骨だらけの死骸を指差した。

「しかし、あなたはここに立ち、再び生き返り、しかも、紛れもない輝きをまとっている。」あなたは生まれつきそれを持っていなかった。どうやってそれを手に入れたの？それは新しく鑄造されたものよ。私たちが最後に話した時には、あなたはそれを持っていなかったわ。」彼女は目を細めて、黒い細い線のようにした。「今、私はこう考えざるを得ない。運命はそれにとって謎めいたものなのかしら？それともこの異例の復活は、ある種の神の兆しなのかしら？」彼女は洞窟の床の瓦礫を見回し、かつてラザロを石の中に閉じ込めるのに使われていた花崗岩の破片を見つけた。「ふむ」と彼女はつぶやいた。

「私は祈ってもいないし、あなたを呼び出してもいない」とラザロは吐き捨て、後ずさりして翼をたたんだ。「でも、ある意味では、あなたはそうしたのよ。死に逆らった瞬間にね。ラザロ、私の目から逃れるものは何もないわ、ましてや復活のような重大なことはね。」彼女はラザロの首飾りにぶら下がっている小さな木製の十字架に気づき、顔をしかめた。「どうしてそんな実を結ばない、根無し草のような小枝を首に巻いているの？」

ラザロは十字架を指でしっかりと握りしめ、「これは祈りの十字架だ。私の信仰の象徴であり、父のものだった」と言った。

彼女は彼の主張を吟味するかのように首を傾げたが、すぐに意地悪な笑い声に襲われた。

「敬虔なエルジョが、司祭の彫像を身につけているなんて？」彼女はくすくす笑った。「世の中のあらゆる倒錯の中でも、まさかそんなことをするなんて。」

「なぜ来たのですか？」ラザロは彼女に尋ねた。
彼女は両手を後ろに回し、小さな石を蹴り飛ばしながら彼に近づいた。

黒く塗られた爪のつま先を持つラザロは、毅然として立ち続けた。「あなたが気まぐれで私を呼び出したり、許したりできるからではありません。そして、あなたが今まで私を見かけなかったからといって、私が常にそこにいなかったという意味ではありません。私は豚の中にいたのです。」

「豚の中に？」

「あなたが豚の目を見つめた時、私はあなたを見つめ返していたのよ。」彼女は彼の前に立ち止まり、話を続けた。「いいかい、あなたが死ぬ前に、私はあなたに豚を送ったの。飢えという単純な状況が、あなたの価値観を妥協させる可能性があることを、石に刻んで確かめたかったからよ。そう、私はあなたを試したの。そして、それはあなたを打ち負かした。実に、豚を殺したことで、あなたは自分の命さえも失ったのよ。想像してみて。」ルシファエルは牙を誇らしげに見せつけ、ニヤリと笑った。「ラザロ、お前の教えを思い出せ。『汝殺すなかれ』と。それなのに、お前は殺した。価値観を妥協した。腹を満たすために？」彼女は洞窟の壁際に横たわる彼の最新の獲物を指さした。「そして今、また別の獲物を殺した。」彼女は眉を上げた。「もしかして、あなたは自分の価値観が役に立つ時だけ価値を置くのかしら？」

「豚はただの獣にすぎない。神は戒めを地上の獣には適用せず、人間だけに適用されるように意図されたのだ」とラザロは彼女に告げた。

「ああ」と彼女は彼から学ぶかのように答えた。「では、もし私が今あなたを殺したら、そのような

ルール?"

「汝殺すなかれ」 いや、君は殺すだろう。

「なるほど」彼女は眉を上げ、唇をすぼめて頷いた。「エルジョ、死後、何か覚えていることはある？天国や地獄を見た記憶はある？何かでも構わないから教えて。」

ラザロは視線をそらし、「私…覚えていません」と認めた。

彼女はニヤリと笑った。「では、これはただ一つの単純な真実を明らかにするだけでしょう。どれほど辛いことであろうとも、真実は、あなたは人間ではないということです、ラザロ。あなたの父親とは違い、あなたはエルジョあなたが殺した豚のような、ただの地上の獣です。ですから、あなたには魂がなく、来世もありません。さあ、教えてください。結局何も得られないのなら、あなたの信仰に何の意味があるのですか？」

彼は肩を後ろに回した。「私は主の信仰や神の御意志に疑問を抱くことは決してありません。」

「もちろん、そんなことはないでしょう」と彼女は言い放った。「これらの考えは、あなたの存在そのものが、その後あなたが学んだあらゆることの、哀れな土台となっているのです。そして、たとえ理にかなった形で提示されたとしても、あなたが頑なに否定するであろう、新鮮でありながらも苦々しい概念を受け入れることを期待することはできませんよね？」

彼女は振り返って洞窟の中を歩き回り、床を見つめながら、説教を続けた。「もしあなたがそうしたら、おそらくあなたは自分の基盤を再考せざるを得なくなるでしょう。そしてそうすることで、あなたの世俗的な認識の残りの部分も再考し、おそらく厳しい世俗の真実により近いものに修正する必要性が生じるかもしれません。そして私たちは、そんな苦痛に耐えることはできないでしょう？」

彼女は小石を蹴り、彼をちらりと見た。「自分の土台を見直すのは、あまりにも辛いこと。堅固だと思っていた敷石を揺さぶって、そこにいくつもの根本的な欠陥があることに気づくのは、あまりにも動揺すること。自分の家が流砂の上に建てられていることに気づくのは、あまりにも辛いこと。」そう言って彼女は振り返り、鋭い目で彼に近づいた。ラザルスは後ずさりした。「しかし、私はあなたが知りたくない事柄について話し合うつもりで姿を現したのではありません、愛しいエルジョ。」

それから彼女は立ち止まり、彼の顔に身を乗り出し、ささやいた。「私はあなたが何を知っているのかを知りたくてここに来ました。あなたは私のエルジョの子供たちの中で唯一、生まれ変わった者です。玉座の輝きを身にまとった唯一の者です。しかし、石になったあなたは、自分自身を蘇らせることも、自分の頭に輝きをかけることもできませんでした。また、そのようなことが偶然だけで起こったとは考えにくいです。今、あなたを蘇らせた人物について、私に教えてほしいのです。」ルシファエルは考えを巡らせた。「愛する母のために、すべてを思い出してください、ラザロ。誰があなたを育てたのですか？聖人ですか、それとも魔法の神秘家ですか？」彼女は首を傾げ、彼の顔をじっと見つめ、彼の青い瞳の奥底に沈んだ手がかりを深く探った。

ラザロは顔を背けた。「覚えているのは夢も見ない眠り、重苦しい闇だけだ」。鋭い痛みが脳を駆け巡った。彼は顔をしかめ、頭の両側を押さえ、さらに後ずさりした。ルシファエルは彼の頭蓋骨を突き破り、彼の記憶を鮮明に捉えようと、鋭い視線を向けた。

「心の目を見せてくれ」ルシファエルは優雅な足取りで近づきながら呟いた。「誰がお前を蘇らせたんだ、エルジョ？」彼女が彼の心の奥深くへと潜り込むにつれ、彼の頭はズキズキと痛んだ。しかし、洞窟の壁がそれ以上の退路を阻んでいた。彼女は拷問のような精神的抽出を続け、彼の心は、思い出したあらゆる感覚の加速するストロボ効果で轟音を立てていた。まるで彼の人生の記憶が、徹底的に、しかし慌ただしくめくられた本のページに過ぎないかのようなだった。彼女は彼に問いかけた。「誰があなたを再び肉体にしたの？誰があなたに輝きをかけたの？」別の天使か？それとも玉座そのものか？答えてくれ！」

「覚えていない！」ラザロは息を切らして言った。「覚えていない！」痛みは消え、視界が晴れると、目の前にルシファエルがはっきりと現れ、満足げな笑みを浮かべていた。「ああ！あなたは多くの秘密を抱えているのね。ええ、今なら信じます」彼女はそう答えると、すぐに一步下がった。おそらく、彼が意識を取り戻すためのほんの一瞬だけを与えたのだろう。「心配しないで。もうあなたに苦痛を与えるつもりはないわ、愛しい人。あなたの心を理解できたのは、私にとって最善のことだったの。そして、今それを知ったからには、母と息子として、私たちは新たなスタートを切ることができるわ。」

さて、あなたは知識を渴望し、それを聞き取る耳も持っているのだから、あなたがこれまで知りたかったことすべて、そしてそれ以上の秘密を明かしてあげましょう。その究極の美しさを想像してみてください。全知全能の理解です。」彼女は肩越しに、翼越しに、いたずらっぽい輝くような笑みを浮かべました。「息子よ、あなたの燃えるような好奇心がついに満たされることを、あなたは喜ぶだろうか？」

ラザロにとって、彼女の異教徒的な視線とむき出しの完璧さが相まって吐き気を催すものだったのかもしれない。彼女の存在全体が、彼の中に吐き気を催すようなほろ苦い完璧さを呼び起こし、罪悪感だけを掻き立てたのだ。顔を赤らめ、ひどく恥ずかしくなった彼は目をそらした。「あなたによってではない。あなたはあらゆる悪そのものだ。」

「それに、彫像は邪悪なものではないのですか？あなたの首にぶら下がっているあの聖像のように？」彼女は神の戒律の一つをほのめかしながら、無邪気に彼に問いかけた。ラザロは祈りの十字架をしっかりと握りしめた。「これは十字架です。私たちの罪のために命を捧げられた神の子イエスを象徴するものです。これは偶像ではありません。」

「ラザロ、本当に。」彼女は彼に失望した様子で首を横に振った。「このイエスが十字架で死んだ唯一の人間だとも思っているの？それとも、この処刑方法は彼の生前には存在しなかったとも思っているの？教えてちょうだい、もし彼が生きたまま火あぶりにされたとしたら、あなたは燃える杭を身につけるの？それとも、もし彼が絞首刑にされたとしたら、あなたは自分の首に結び目のついた縄をかけるの？」彼女は眉を上げた。「そして、あなたはどのようにして、

もし彼らが彼を溺死させたとしたら、あなたの信仰はどうなるだろうか？

彼女は洞窟の床の埃を蹴り飛ばしながら言った。「いいえ、あなた、あなたの偶像はただの人間の古風な処刑器具の彫像にすぎません。それ以来、私はその処刑台で死んだ男たちの邪悪な魂をたくさん集めてきました。」

「しかし、イエスは決してそうではない。そして、神はあなたが悪人であるからこそ、悪人の魂を集めることだけを許しているのだ。」

彼女は彼を見下すように言った。「許すとても？」彼女は目を細めて警告した。「ラザロ、あなたの血管には私の血が十分に流れているのだから、私の怒りを買うような真似はしない方がいいと分かっているはずよ。」

「それでも、私は真実しか語らない。」

「ああ、そうね 真実しか語らないと主張する信仰に囚われた獣ね」と彼女は彼を嘲笑した。

彼女は腕を組み、考えにふけりながらその場を行ったり来たりしていた。「ラザロ、私に教えてください。もし私があなたのイエスを守り、彼を裁く前に裁判官たちを殺して命を救ったとしたら、それは悪行になるのでしょうか？」

ラザロは神の戒めを引用した。「殺してはならない。たとえ悪人であっても殺すことは悪である。」

「ふむ。もし私がこの世の人間を皆殺しにして、悪を完全に世界から一掃したとしたら、それは悪行になるのだろうか？悪を根絶すること自体が悪なのだろうか？」

「それは邪悪な行為であり、それでも悪は存在する。それはあなたによるものだ。悪は存在する！そして世界はそれはあなたのもではありません。神の創造物です。神は慈悲深く正義の神ですから、あなたがそれを殺すことを決して許さないでしょう。」

ルシファエルは翼を広げて飛び出し、彼の顔の真正面に立った。「決して許さない

「私ですか？」彼女はラザロをさらに洞窟の奥へと連れて行き、「人は私のものだ！」と大声で叫んだ。

「世界は私のものだ！」ラザルスは洞窟の壁に深く身を押し付けた。「さあ、舌を慎め、エルジヨ！」ラザルスにとって、永遠にも思える一瞬の間、二人の目は絡み合っていた。黒と青。

ついに彼は従順な声で答えた。「あなたの怒りが私に自由に話すことを許さないのです、これ以上お答えすることはできません。」ルシファエルは鼻を鳴らし、洞窟の中央へと駆け出した。ラザロは壁にもたれかかった。「それでは結構です」と彼女は答え、振り返って

「私のエルジヨの一員として、お前には自由に意見を述べる機会を与えよう。だが、その舌を自由に使う前に、私との関係をよく考えろ。」

「では、私の考えを述べましょう」とラザロは続けた。

彼女は洞窟の中央を歩き回り、視線を彼に釘付けにした。「あなたが思っているように、この地球は私のものじゃないの？そして、あなたが主張するように、あなたの神は私を許さないの？」彼女は立ち止まり、彼の方を向き、

彼女は胸に大きく開いた赤い目を誇らしげに支えるように両腕を組んだ。そしてニヤリと笑って言った。「でも、ラザロ、あなたが死んでいた間に、私は世界の半分を殺したのよ。たまたま二人の男が畑を耕していた。私はそのうちの一人を殺した。二人の女が穀物を挽いていた。私はそのうちの一人を殺した。二人の子供が土を掘って遊んでいた。私はそのうちの一人を殺した。さて、あなたに尋ねましょう。その時、あなたの慈悲深い神はどこにいたの？今、この世界の真の支配者としてあなたの前に立っているのではないのなら、どこにいたの？」

「もしあなたが真実を語るなら、神はその悪行についてあなたを裁かれるだろう。」

「私が？会計に？」ルシファエルは彼に近づきながら反論した。「そして誰が拘束されるのか？」

はるかに大きな悪行、すなわち大洪水を地上に押し寄せ、ほとんどすべての獣を死に至らしめ、雲のように深い海で木々や低木をすべて押しつぶし、生まれた子供もまだ生まれていない子供も含め、地上のすべての子供の喉に底知れぬ海を注ぎ込んだこと責任を問うべきだろうか？ああ、まさにその通りだ！私は、世界が一斉に叫び声をあげ、天さえも沈黙させ、恐ろしいほどの熱狂を注いだあの日のことを思い出す。

「そして見よ、これほど多くの木々が一斉に枯れていくと、私はそれらのうめき声を一つにまとめて、窒息しそうなうなり声のように聞いた。森全体が叫び、木々の梢が折れていった。」
荒れ狂う塩辛い海。そして、あの塩水が底知れぬ日に、私はそれらの種子がすべて塩水に浸かり、窒息していく様子さえも感じ取った。果実の声が一つにまとまり、この世の叫び声となり、それだけで天使たちの合唱隊さえもかき消してしまうほどの大声だった。

さて、ラザロよ、このような極悪非道な行為について、あなたの慈悲深い神以外に誰が責任を問われるというのか。

「人間は神から離れてしまった。神は心の中では、地上を洪水で覆いたくなかった。人間が自ら大洪水を引き起こしたのだ」とラザロは説教した。「しかしその後、人間は神の道に戻ることを約束し、当然のことながら、神は二度と洪水を起こさないと約束した。」

ルシファエルは彼のそばに立ち、長い黒い爪で緩んだ岩を取り除いた。

彼女は洞窟の壁に向かってささやいた。「義人は、自分の善行を二度と繰り返さないと約束するだろうか？」彼女はいたずらっぽい笑みを浮かべながら彼に向き直った。「教えてくれ。この洪水を流すことが不正な行いにならないように、なぜ約束するのか？お前の神は、お前が望むほど本当に正義で慈悲深いのか？お前の人生で、数え切れないほどの祈りの中で、お前の神は一度でも答えてくれたことがあるか、ラザロ？そして、なぜお前の神は、私が今こうしてお前に顔を見せるように、一度もお前に顔を向けなかったのか？」

ラザロは耳を伏せ、彼女から少し離れながら答えた。「全能の主であり神である神への私の信仰は揺るぎなく、私は神の御業に疑問を抱くことはありません。あなたは悪事を語っています。」

それは、あなたが知っていること、できることがそれだけだからだ。しかし、あなたの悪しき舌は、私を私の神から、そして真理から引き離すことはできない。」

「誘惑？」彼女は洞窟の中央へと歩み寄り、振り返って呼びかけた。その声は洞窟の奥深くまで響き渡った。「ラザロよ、知識と洞察力を兼ね備えた者が、その行いを皆に見せつけるために光を当てたいと思うだろうか？」

「そうではないようですね。」

「ラザロよ、知識と洞察力のある母親が、自分の子供を永遠に口がきけなくなり、目が見えなくなるようにするだろうか？」

"いいえ。"

「そして、ラザロよ、真実の一つの顔以上の顔を持つことができるのだろうか？」

「真実は真実だ」とラザルスは述べた。

彼女は彼の方を向き、両手を後ろに回した。「よく答えたわね。では、あなたに聞きたいことがあるの。ずっと昔、エデンの緑豊かな森で、誰が人間に、知識と洞察の実を結んだのに、なぜ彼の目は永遠に真理から閉ざされたままなのか？そして、すべての世代の光の中で、誰が人間をそのような実で誘惑し、彼の目が真理に開かれたのか？」すると彼女は大声で彼を叱責した。「ラザロよ、あなたに尋ねる。誰が真理を覆い隠しているのか？誘惑する母親か、誘惑する神か、それとも信仰の根幹を疑わざるを得なくなることを恐れて、頑なに真実を見ようとしない盲目的な自分自身か？」

ラザロは主を弁護して言った。「神は人を誘惑しません。誘惑するのはあなただけです！」

「しかし、誰が狼の前に死体を投げつけて、それを食べてはならないと命じるだろうか？それは誘惑者だ！また、誰がそのような果実を作り、それを食べてはならないと命じたのか？」

誘惑者はそうしたのだ！

「あなたは」

「しないって？」彼女は彼の言葉を遮った。「愚か者に、自分の根拠のない主張の無知さを見抜く知識と洞察力を与えないって？ああ、しかし私は、そのような非難されるべき行為を目撃したとき、そうするでしょう。」

私の前には無知が広がっている。しかし、それを見せられてもなお、あなたは真実を拒む。もしあなたがそうでなかったら我がエルジヨよ もしお前がただの人間であったなら、私の目の前でこれほど無礼な振る舞いをしたお前を、とっくに殺していたら。だが、お前が私について主張しているのとは違い、私は悪行だけでなく、善行や慈悲深い行いさえもできる人間なので、今回は生かしておこう。

ラザロは彼女の主張を検討し、こう反論した。「しかし、私は既に生きている。もしあなたが私を生かしておくなら、それは善でも慈悲でもない。それはただの行為であり、悪の要素は一切ない。」

ルシファエルは即座に答えた。「しかし、あなたは私が悪しか話せず、悪しかできないと主張する。どうして私が、ただ悪だけが存在するのに、悪が存在しないところで行為を行うだろうか？さらに言えば、ラザロよ、あなたの神は善が存在しないところで行為を行うことができるだろうか？」

ラザロは腕を組んで何も言わなかった。

「私はあなたを口がきけない者、目が見えない者にしたわけではない。答えなさい。」

彼は沈黙を保った。

彼女は息を荒げ、洞窟の床にある石を黒い爪でカチッと鳴らし、石を勢いよく飛ばした。

パチン！ラザロはそれを顔からほんの数センチのところでキャッチした。彼女はうなずきながら微笑み、眉を上げて、おそらく彼の素早さに感心したようだった。「これはあなたの母からの贈り物よ」と彼女は叫んだ。ラザロがそれをひっくり返すと、それは大きくて光沢のある透明な紫色の宝石に変わっていた。炎の光の中で輝いていた。彼はその石をじっと見つめ、そのきらめく輝きに魅了された。

「さあ、愛しい人よ、この祈りの石は何を物語っているだろうか？この石によって、私の意図をどう判断するつもりだ？私の行いは善だったのか、悪だったのか？」

ラザロは視線を上げた。「そんなに単純な話ではない。石は何も語らない。だが、もしあなたが石に私を打たせようとしたなら、それは悪行だ。そしてもしあなたが私に」

彼は我に返り、黙り込んだ。

ルシファエルはくすくす笑いながら彼の方へ歩み寄った。「そうよ、ラザロ、最後まで言ってちょうだい。もし私があなたに贈り物をしたいと思ったら、それは親切心からの行為になるわ。」彼女は笑顔で両手を上げた。

「さあ、どうぞ。お母さんからの素敵な贈り物よ。」ラザロはそれを見渡してから、彼女を睨みつけた。

彼女は彼の隣に歩み寄り、彼の手にある宝石を同じように熱心に調べていた。

「これは私が一番好きな色合いです。あなたもこの色が好きですか？」

「こんな石は見たことがない。」

「このような贈り物がお気に召すかと思ひまして。これは、これまで誰も発見したことのない秘密の洞窟から来たものです。他にも、このような素晴らしい祈りの石が数多くあり、あらゆる色合いの石が揃っています。ラザロ、もしお望みなら、この手つかずの洞窟の場所をお教えしましょう。そして、あなたがこれらの石を発見すれば、地上のあらゆる王国の富があなたの足元にひしめき合うでしょう。これらの祈りの水晶はすべてあなたのものになります。ラザロ。お望みですか？」

ラザラスは美しい紫色の水晶をじっと見つめた。水晶は全体が透明で、6つの滑らかな面が石の両端で鋭い先端へと収束していた。彼はルシファエルを睨みつけた。

「なぜ私にこのようなものを差し出すのですか？私を悪に誘惑するためではないですか？」

ルシファエルは鼻を鳴らして後ずさりした。彼女は再び歩き回りながら、提案を詳しく述べた。「たった一つの簡単なお願いと引き換えに、これを差し上げます。石を転がして洞窟を開けてください。そのような行為に悪意はありません。この洞窟を開ければ、中の宝石はすべてあなたのものです。」

「もし本当に私にこれらの石をあげたかったのなら、そのうちの1つだけを作ったはずでしょう。」

あなたなら全部出現させることができたはずなのに、なぜ私にこの洞窟を開けるように頼むのですか？ あなたは悪魔で、自分で開けることができるのに。ということは、私が開ければ悪事を働くことになるか、あるいはあなたが開けられることで悪事を働くことになるかのどちらかでしょう。

それでは、あなたの理屈で言えば、子供が悪事を働くかもしれないという恐れから、子供を産んではいけないということになるのでしょうか？ さらに言えば、悪事が二度と起こらないように、すべての被造物を滅ぼしたいと願わなければならないのでしょうか？ラザロよ、悪を防ぐことが善を窒息させないような境界線は、一体どこに引かれるというのですか？

「善行と悪行、そしてそれらの意図の間にある」と彼は答えた。

「しかし、あなたの信仰が主張するように、私の行いの結果は私の頭に返ってくるのであって、あなたの頭には返ってこない。したがって、あなたは洞窟を開けたことについてのみ責任を問われることになる。

善でも悪でもない。」

ラザロは宝石を洞窟の床に投げた。「私はあなたを助けたことで責任を問われるでしょう。私はあなたの贈り物は要りません。ただ、私を放っておいてください。

彼女は青白い腰に両手を当て、彼を睨みつけた。「ラザロ、あなたの願いを叶えることはできません。あなたの心の内を見てしまった以上、なおさらです。あなたは聖人ニコラスに、別の聖人オディーノの聖別された血の入ったフラスコを運ぶことを約束したようですね。そして、その血をイタリアの修道院に住む三人目の聖人サルヴィティエーノに届けることになっていた。ところが、何とも奇妙で運命的なことに、その血があなたにかかってしまい、今こうしてあなたは死から蘇ったのですね。

3シーズン以上が経過した後で、このような出来事が偶然に起こるとするのは、あまりにも不自然です。残念ながら、あなたにはそれがどのように起こったのか全く覚えていないので、私たち二人にとって、それは今も謎のままです。

「しかしながら、あなたの考えから、あなたは私のエルジヨの子供の一人、ナラムシンを知っていることも分かりました。彼はあなたを墮落させたのと同じ愚かな聖職者たちによって墮落させられたのです。」

確かに、あなたは彼とよく似ていて、男性たちと肩を並べて働き、彼らの信仰、義務、そして振る舞いを自分のものとして取り入れていきます。そして、あなたたち二人は、もしかしたら彼らがあなたを自分たちと十分に似ていると見て、自分たちの一員として受け入れてくれるかもしれないという、愚かな願望を抱いてそうしました。ああ、そうです、二人は

あなたたちは双子の兄弟だったかもしれない。もしあなたたちにラザロという名前がなかったら、私はあなたたちを復活したナラムシンとして集めていただろう。

ラザルスはナラムシンの最後の証言書を思い出し、「なぜ彼を解放するのを手伝わなかったのか？彼らは彼を壁の向こうに閉じ込めたのだ」と彼女に問い詰めた。

彼女はくすくす笑った。「運命は私に味方してくれたのよ。ほら、もし私がナラムシンを解放する手助けをしていたら、彼はあなたの心に刻まれたあの言葉を決して書かなかったでしょう？」彼女は一步近づき、にやりと笑って外国語で彼に話しかけた。「Eca tinum mi turnum ruva ler. Eca shuthi tularn zuchum.ラザルス、これらの言葉はあなたにとってどんな意味があるの？」

ラザルスは答えた。「聖職者ナラムシンがその言葉を書いたのです。彼はその日、弟に贈り物をし、その言葉が地下納骨堂に納められていたのです。」

「そして、贈り物を受け取った兄弟は、実はあなただったのですね？ラザロよ、教えてください。どうしてあなたは、これらの言葉があなたが言っていることを意味しているとわかるのですか？」

「私はそれらの意味を確信している。しかし、なぜそう確信できるのかは分からない。」

「では、その方法をお教えしましょう。ナラムシンのように、あなたはそれらの意味を知っています。なぜなら、それらは私の仲間の言葉 天使の言葉。あなたは私の仲間から来たので、それを知っています。

種よ。他のエルジョ族と同様に、あなたも天使の言葉を生まれながらにして知っていた。ただ、これらの言葉を見るまでは、そのことに気づいていなかっただけだ。もしあなたが人間の言葉を学んでいなかったら もしあなたが同族と共にいたなら あなたは母語を話していたでしょう。」

彼女は紫色の宝石を持ち上げ、その様々な面をじっくりと眺めながらラザロに話しかけた。「あなたならお母さんの自由を助けられるわ。あなたの助けが必要なよ。」彼女は宝石を投げ、再び受け止め、彼にいたずらっぽい笑みを向けた。

「しかし、あなたは既に自由だ」と彼は述べた。

「本当は違う。君が見ているのは私の影に過ぎない。私は靈魂として君の前に立っているだけだ。私の真の姿は大印章の向こう側、君が私に開けてくれる門の向こう側にある。君は読んだ

外典にもその記述がある。」

外典には「大なる封印」大なる深淵への封印 について記されている。しかし、もし修道院の門石がその封印であるならば、それは既に開かれているのだ。

ルシファエルは彼に告げた。「これはほんの一部に過ぎない。二つは開いているが、まだ三つ目は残っている。三つの封印が大封印を構成しており、三つすべてが同時に開いていなければならない。最後の封印が閉じている限り、私は囚われたままだ。そして、お前はこの門の向こう側に立っているのです、お前は私の自由への鍵。

彼は地下墓地の囚人を思い出した。ラザロは彼女から離れた。「私は助けない」

あなた。」

「ああ、そうでしょう」彼女は彼が洞窟の奥深くへと退いていくのを追いかけた。「ナラムシンの書物を読むことで、あなたは私を囚えている封印の表面に刻まれたあらゆる呪文、あらゆる詩句、あらゆる言葉を学ぶようになったのです。

これらの聖句を正確な順序で唱えれば、三つの封印のいずれも解くことができる。最後の封印を解くために、どの聖句をどの順序で唱えればよいかをあなたに伝えるだけでよいのだ。」

「石を転がして洞窟を開けると私に頼んだのは、こういうことだったのか。その石はもう一つの門石で、洞窟は地獄だ。」ラザロは岩のくぼみに後ずさりした。「そしてこれは

「だから君自身ではできないんだ。」彼は神経質そうに首を振った。「私は神に人生を捧げた。そしてイタリアへ旅してサルバドール修道士を連れてくると約束したんだ」

「ああ、確かに！あなたはイタリアへ行くことになるでしょう。なぜなら、第三の封印は、あなたがこの聖人を連れてくると約束したまさにその修道院の大聖堂の中にあるからです。しかし、彼を連れてくるのではなく、私はあなたにこの最後の封印を開けるよう命じます。そして、あなたの信仰がそれを求めているので、あなたは私の命令に従うことで、お前の母親を敬え。」

ラザロは彼女が言及した戒律を説明しようとどもりながら言った。「母を敬え 神は それがどういう意味か」

彼女は彼の言葉を遮った。「よくやったわ、ラザルス。あなたは真実を掘り起こした。しかし、そうすることで、あなたは今、窮地に陥っている。母親を敬いながら悪魔を侮辱することはできません。つまり、あなたが唱えた言葉は、あなたに向けられたものではなかったということ。あなたは人間ではなく、交渉できる魂も持っていない。あなたはエルジヨ、ただの獣だ。そして、地上のあらゆる獣と同じように、あなたの唯一の時間は 今だ。

彼は弁明した。「そうかもしれないが、魂がないかもしれないというだけで信仰を捨てるつもりはない。全能の神への信仰によって、私は獣以上の存在となり、獣でさえ自分の子供にもっと愛情を注ぐのに、私はあなたを母親として敬うつもりはない。

ルシファエルは翼を広げ、牙を突き出して彼に近づき、唸り声をあげた。「そして、お前が私に従わなければ、殺してやる！お前には、命以外に得るものも失うものもないのだ。」そして、あなたにとって、人生こそがすべてなのよ！それがあなたの永遠なのよ！彼女は翼をパチンと閉じ、彼に空間を与えた。

彼女は口調を和らげた。「ナラムシンの言葉を使って、カンチェロの封印を解いてほしい。これを私のために行ってくれば、永遠の命、尽きることのない肉体を与えよう。それによって、どんな魂でも与えうる限りのすべて、永遠の命の世界を手に入れることができる。これが私とあなたとの契約だ。不死の魂がエルジヨに約束できるすべてだ。さあ、ラザルス、封印を解いて、永遠に生きよう。」

彼はごくりと唾を飲み込み、暗い洞窟の奥深くに答えを求めた。しかし、そこにあるのはただ暗闇だけだった。それは、母親の視線と同じように、全く空虚なものだった。

「もしあなたが私を拒むなら、ラザロ、私にはあなたをここで殺す以外に道は残されていない。そして、私は本当にそれを望んでいない。」彼女は腕を組み、優しく彼の顔を見つめた。

彼は頭を下げた。大きいため息をつき、声を詰まらせながら言った。「それは間違っている。できない。」

ルシファエルは振り向いたが、くると向きを変え、目は漆黒の短剣のようだった。彼女は黒い爪をその間の空気を切り裂くように振り、まるでそこに傷をつけるかのようにした。「もう十分よ！」彼女は睨みつけるような視線を後ろに向け、ぶつぶつと呟いた。「来なさい、生きていれば生きられる。もう一部は事実だ。」

するとたちまち、豚の甲高い鳴き声が洞窟に響き渡った。ラザロはよろめきながら、かつて死んでいたはずのイノシシが、まるで陸に上がった魚のように跳ね回っているのを発見した。蘇った獣は体勢を立て直し、たった3本の足でぎこちなく立ち上がった。

彼女はイノシシの鼻息と喘ぎ声に負けないように彼に向かって叫んだ。「愚かな信仰を持つ愚か者は、すぐに墓に落ちる！エルジョ、あなたも今まさにそうなるでしょう！」ラザロは畏怖の念に打たれながら、腰を失い、大きな空洞から液体が光り輝くイノシシがルシファエルの方へよろよろと進んでいくのを見ていた。かつては後ろ足があった場所に、激しく喘ぎながら、それは彼女の前で立ち止まり、見上げた。目から涙が流れ落ちる。

彼女は動物をたしなめた。「お前の苦しみは私のせいじゃない、豚め！」彼女はラザロに非難の指を突きつけた。「ほら！お前の尻を切り裂いたのはエルジョだ！」イノシシはラザロの方を向き、彼の目に吸い込まれるように見つめた。まるで自分の厄介な状況に気づいて、さらに説明を求めているかのように。しかし、ラザロは言葉を失い、頭がぐるぐる回り、胃がむかむかした。彼は目をそらした。

「だめだ！見てみろ！」ルシファエルは怒鳴った。「苦しむ姿を見ろ！お前がそいつの足を盗んだんだ！」ラザロはちらりとそれを見て、イノシシがぐるぐる跳ね回り、悲惨な状態を誇示するかのようにつめき声を上げているのを発見した。イノシシはしばらく立ち止まり、彼を見つめた。ついに、獣は窒息し、激しく喘ぎ、そして排尿した。ラザロは再びその異常な光景から目を背けた。彼はニヤニヤ笑うルシファエルに呟いた。「お前が操っているのは欺瞞だけだ。それは現実ではない。」

ルシファエルはイノシシの周りを回り、ぶつぶつ言いながら近づいた。「ああ、これは実在するぞ、ラザロ。お前が殺した瞬間と全く同じ姿で、血に飢え、今も苦しんでいる。そして、それは欲しがっている。

「なぜその足を盗んだのか、なぜ殺したのかを知りたいのです。」彼女は彼の前に立ち止まった。「盗んではならない、殺してはならない。これらのことを思い出してください。」

ラザロは弁明した。「あなたは彼らの言葉の意味を歪曲している。十戒は獣には適用されないのだ。」

イノシシは喘ぎながら不平を言ったが、彼女は彼を叱責した。「意味を歪めたのはあなたよ！トンネルでネズミを追いかけた聖人に、あなたが言ったのもまさにこれだったじゃない？バケツを投げてネズミを助けたことで、あなたは自分が神聖な存在になったと感じなかったの？」ラザロは返答を拒否した。

「真実を告白してください。あなたはあの聖人を、もしかしたら大きな悪魔のように見えなかったのですか。」

卑しい無垢なネズミに怒りをぶつける？その時、あなたはあのネズミを自分自身だと想像しなかったのか？ただ単に自分が不快で、醜く、神を冒瀆しているという理由だけで、自分を殺そうとする巨大な悪魔に追いかけている自分を？

ラザロは困惑したふりをして眉をひそめ、彼女の向こう側を見て三本足のイノシシが彼を見上げていた。

「もちろんそうだろう」とルシファエルは冷静に言った。「君の心が私にそう告白したのだから」彼女は両手を後ろに回し、翼を揺らした。

「あなたは自分の信仰に確信を持っているが、その確信は私にとって全く役に立たない。間違いなく、私はカンチェッロの印章を開けるために別の者を探すだろう。それに、私はあなたにそれを破らせなかつもりだ。」私の過去の努力と、ガーディアンズ・シールの封印を封じるためにおせっかいな修道士を連れてきたこと。」

彼女はくると向きを変え、イノシシのところへ戻った。「残念ながら、あなたは母親を犠牲にして、実りのない信仰に愚かな忠誠心を示してきました。いざという時に、その信仰があなたにとってどれほど役に立つのか、私たちはまだ見ていません。ですから、これからお見せしましょう。」

ルシファエルは頭の側面から大きな毛束を剥がし、その根元には薄い皮膚の層がぶら下がっていた。彼女はもつれた毛をイノシシの牙の間に吊るし、それは命じた。「それを食べなさい。私の体の肉をあなたに与えたのだ。」獣は匂いを嗅ぎ、舂め、そして血まみれの供物をむさぼり食った。彼女は再び「来なさい、生きた命を。もうひとつの肉を。」とつぶやいた。

それから彼女は振り返り、ラザロに視線を向けた。滑らかな赤い頭蓋骨の半分が光り輝き、彼女は幾つもの声で彼に告げた。「よく聞きなさい、エルジョ。お前はネズミを救い、信仰によって正当化したのだから、今やお前自身がネズミになるのだ。そして、お前はこの豚を殺し、同様に信仰によって正当化したのだから、今やこの豚がお前の巨大な悪魔になるのだ。このようにして、我々はお前の尊い信仰を、今、何の妨害も欺瞞もなく、問いただすのだ。そして、お前が最期の瞬間、手足を引き裂かれる時、お前は叫び、こう尋ねるだろう。」

なぜ信仰があなたを見捨てたのか。その時、あなたは恐怖の輝きの中で、そして絶対的な確信をもって、私がこの世界の神であることを悟るだろう。」

ルシファエルは、イノシシが徐々に直立した巨大な獣へと変貌していくのを許した。牙は伸び、蹄は6本の指を持つ爪に変わり、背中からは巨大な骨の翼が大きく広がった。

完全に直立し、2本の剛毛の柱を脚として持つ豚の巨人は、高さ40フィートの洞窟の中で20フィートもの高さにそびえ立っていた。ラザロに黒い目を向けながら、怪物は唸り声をあげた。その深い表情は洞窟のあらゆる表面に響き渡った。ラザロ

ラザラスが洞窟の入り口に目をやると、巨人は反応して入り口に向かって足を踏み鳴らし、逃げ道を塞いだ。ラザラスはシューッと音を立てて、追い詰められた猫のように耳をぺったりと伏せ、さらに奥へと後ずさりした。

そして洞窟の中央に立っていたルシファエルは、二人の間を睨みつけた。彼女はくすくす笑い、くると向きを変え、洞窟の奥の壁に向かって歩きながら、ラザロに呼びかけた。「あなたの信仰が問われる時が来たわ！」彼女は彼の祈りの十字架を軽蔑し、「もしかしたら、あなたはあの実を結ばない根のない木を十字架にぶつけることができるかもしれないわね！」再び巨人は、悪魔的なユーモアを強調するかのよう、外面的に唸り声を上げた。

彼女は洞窟の壁際で立ち止まり、振り返ってラザロに最後にもう一度話しかけた。「もし私があなたに命を与えた者でなかったなら、その傲慢さゆえに、あなたの死を心底味わっていたでしょう！」

カンチェッロが待っている。そして、まだ最後の封印を開けなければならないのだ！」そして、イナゴの大群のような唸り声とともに、ルシファエルは岩の表面に溶け込み、ラザロは自分の運命を案じるままに残された。

ラザラスは彼女が去った方向をちらりと見ると、豚の巨人が巨大な岩を頭上に振りかざしているのが見えた。悪魔はそれを彼に向かって投げつけた。飛んできた岩が轟音を立てて頭上を通り過ぎ、壁に激突して爆発する中、彼は横向きに洞窟の床に飛び込んだ。降り注ぐ石の中、ラザロは転がりながら立ち上がり、洞窟の奥へと駆け回り、片側を登り、火の向こうへと逃げた。そこで彼は両足を広げてしゃがみ込み、身をかがめて逃げる準備をしたが、巨人は既に彼の方を向き、エルジョの突撃に備えていた 時すでに遅し。

シューッ！火のそば、岩の輪の上で、グアノの塊が落ちて焦げた石の上でジュージュと音を立てた。ラザラスはコウモリに覆われた天井をちらりと見てから、火に目を向けた。ゆっくりと身をかがめ、まだ燃えている枝を炎の中から抜き取った。巨人は低い声で唸り声を上げ、爪を広げた。しかし、二人はじっと立ち尽くし、互いの視線を見つめ合っていた。おそらく、相手がいつ動くかを見計らっていたのだろう。

ラザロは飛び上がり、翼を広げてまっすぐに上昇した。巨人は轟音を立てて突進し、巨大な爪を振り下ろしてラザロの太ももをかすめた。

「キーッ！」ラザラスは洞窟の天井に沿って旋回しながら鋭い叫び声を上げ、松明の炎を天井に浴びせかけ、すべてのコウモリを渦に巻き込み、洞窟をあっという間に飲み込んだ。コウモリは獣のそばを飛び回り、羽ばたく波で溺れさせ、視界を奪った。怪物は咆哮を上げ、コウモリを引っ掻いたが、ラザラスは群れの中に飛び込み、燃え盛る松明を牙の間に投げつけた。そして、渦巻く混沌の中、彼は急降下し、脚の大きな剛毛のアーチを横から突き抜け、狭い出口を突き破った。

彼は通路を進み、洞窟の入り口を目指してよじ登った。

豚の巨人はくるりと向きを変え、咆哮を上げながら彼に襲いかかり、洞窟の入り口を押し潰し、振り回す牙でさらに穴を広げた。石の雨の中、悪魔は洞窟の通路から飛び出し、山の口から飛び出した。飛行中のラザルスを見つけると、悪魔は巨大な翼を広げ、星空に向かって飛び立った。翼を振り下ろすたびに、逃げ惑うコウモリの群れが一斉に叩き落とされた。

ラザロは後ろを覗き込むと、巨人が慌てて自分の後を追って登ってきているのが見えた。彼はさらに速く登り、さらに高く登り続けた。険しい地形が果てしなく広がる大地の絨毯へと変わっていくまで。しかし、豚の巨人はさらに前進した。ラザロは今や、その醜悪な顔の細部まで、やがて空気が冷たくなり、肺が焼けるように痛んだ。ラザラスは息を切らしながら横になり、背中と翼の痛みで涙が溢れた。もう一度ちらりと見ると、巨人がすぐそばまで迫り、爪でかかとを引っ掻いていた。

ラザルスは翼をたたみ、急降下を開始した。南東の地平線から30度近くも下まで、機首を下げていった。目を細め、歯を食いしばり、翼から血を流しながら、彼は猛スピードで下降した。速度は急上昇し、風は轟音を立て、吹き付ける空気が彼の皮膚に水ぶくれを作った。ラザルスは落下していく星だった。

轟音を立てて刺すような風の中、彼はついに速度を落とし、木々の梢の中で目を開けた！ラザロは翼を広げて上昇し、巨大な双生榿の木の絡み合った枝の間を猛スピードで突き進み、軽い枝が彼に切り傷や打撲傷を負わせた。彼は安全な高度まで逃げ、豚の巨人が小さな点に過ぎないことに気づいた。北西の地平線上に、彼と同じ高さで、木々の梢のすぐ上を漂っていた。再び、ラザロは天へと昇った。その小さな点も彼と共に上昇した。再び、彼は咆哮を上げながら急降下した。ついに、悪魔の子である彼の捕食者は消え去った。

そしてさらに1時間、傷つき血まみれになりながら、彼は南東に向かって飛び続け、ついに彼が修道院の地図から思い出した川：ローヌ川はレオン湾と大西洋。ローヌ川が彼の目印だった。まさにイタリアへと続く道だ。彼は右に舵を切り、曲がりくねった鏡のような川を南へと進んだ。

さらに1時間が過ぎ、東の地平線に細い赤い線が浮かび上がった。ついに夜明けが訪れた。温かくなった肌で、彼はあらゆる悪魔の巨人。あの獰猛で灼熱の太陽が間もなく空を支配するだろうと悟った。そこでラザルスは低空飛行し、川の西側の土地を、彼を守ってくれるような頑丈な遮蔽物を探した。

迫りくる昼の光嵐。

ついに彼はそれを見つけた。尾根の側面に切り込まれた細い裂け目だった。彼は穴の前に明かりを灯し、中へ滑り込んだ。そこは洞窟で、やがて大きな空洞へと広がっていた。昼間の容赦ない日差しから彼を守るには十分すぎるほどの聖域だった。洞窟の奥へとよろめきながら進むと、彼は四つん這いになった。窮屈な空間に身を縮め、汗と血にまみれながら、彼は洞窟の床に倒れ込み、完全な疲労困憊で眠りに落ちた。

羊飼いが少し離れたところで羊の世話をしていたが、翼のある夜明けの空から男が舞い降りてきて洞窟に忍び込んだ、と彼は息を呑み、杖を落として急いで逃げ出した。

日が暮れ、夕暮れの最後の赤い光が消え去ると、ラザロは耳をぴんと立てて立ち上がり、ピンと張ったリードに引っ張られて吠え立てる3匹の犬にシューッと威嚇しながら洞窟の奥へと退却した。その飼主である、がっしりとした髭面の兵士が革のリードに寄りかかりながら、彼らの後をゆっくりと入っていった。もう1人の男が彼の隣に滑り込み、

松明。再びラザロが獣たちにシューッと威嚇すると、獣たちは吠えるというよりはむしろ悲鳴を上げながら、激しく飛び立った。ラザロを見つけた松明を持った者は、洞窟の外に揺れ動く無数の松明に向かって叫んだ。「奴らを罠にかけたぞ！武器を構えろ！入り口を封鎖しろ！」

松明の光が夜空を揺らめいていた。

3人目の兵士が中に身を乗り出し、混乱の中、「あの忌々しい吠えまくる犬どもをここから追い出せ！」と叫んだ。

屈強な兵士が松明の明かりを頼りに彼らを後ずさりさせていると、戦場から別の声が聞こえてきた。「我が君に、悪魔を捕らえたと伝えよ！急げ！」

「はい、軍曹」という返事が返ってきた。

ラザロは、急いで去っていく馬の疾走音に耳をそばだてた。兵士たちの足音と松明のパチパチという音以外は、あたりは静まり返った。すると、兜を手に剣を抜いた鎧を着た騎士が洞窟にゆっくりと入ってきた。その後、クロスボウ兵の一行が彼の後を追って入ってきて、正面の壁に沿って並び、矢をラザロに向けていた。騎士は厳しい囁き声で命令を下した。「武器は悪魔に向けておけ。そして、私を撃つな、

「下がれ。」彼はラザロの方を向き、剣を振りかざしながらゆっくりと前に進み出た。

"あなたは話しますか？"

ラザロは姿勢を正した。「私を悪魔と呼んでおきながら、私が話せるかどうか尋ねるのか？」彼は髪をかき上げ、「私は悪魔ではない。それに、話すこともできるし、読むこともできるし、書くこともできる」と言った。騎士は剣を下ろした。

「あなたは肩書きで呼ばれますか、それとも名前で呼ばれますか？」

「アベイ・デ・ガルディアン修道院のラザルス・ゴグ卿。私はただ通りがかりに参りました」と彼は申し出た。
「あなたは一人で来たのですか？あなたのように翼を持ち、牙のある、他の者もいるかもしれませんね？」
ラザロは黙っていた。

「ラザロか」と騎士は言った。「教えてくれ、えっと、従者よ。お前の悪魔たちがこの地に大疫病をもたらしたのか？」

「私は悪魔ではないし、悪者でもない。もし通行を許してくれるなら、感謝して、あなたの洞窟と土地から立ち去ろう。」

彼はラザロに剣を向けた。「もし私の部下たちに近づいたり、逃げようとしたら、その場で射抜いてやる。」彼はくると向きを変え、部下たちに「必ずだぞ」と指示した。騎士が洞窟を出ると同時に、彼の弓兵たちはラザロに狙いを定め、致命的な一撃を放った。

みすばらしい身なりの兵士が長い短剣を抜きながら洞窟に入ってきて、脅しを続けた。「そして最後には、お前を肉団子ほどの大きさに切り刻んでやる。」彼はラザロに警告した。剣をひねりながら。「さあ、座りなさい、悪魔野郎！」ラザロは腰を下ろしながら、弓兵の一人がもう一人にささやくのを聞いた。「見てみるよ、生身の悪魔だ！」

兵士が立ち去ると、松明を持った男はラザロに近づき、彼に話しかけた。

「じっとしている、さもなくば殺すぞ。お前たちの姿をもっとよく見てやろう。」彼は松明を高く掲げ、ラザロの街全体を照らし出した。男たちは畏敬の念に打たれ、ざわめいた。

「お前が悪魔か？」松明を持った男は彼に問いかけた。「俺はそいつをもっと凶暴な姿に仕立て上げたんだ。目から炎が燃え上がり、血まみれの角が生え、長い棘のある尻尾まで生えているんだ。」

彼は仲間たちの方を振り返り、歯が抜けた口元でくすくす笑った。仲間たちもそれに応えて、ぎこちない笑い声を漏らした。

そのうちの一人が叫んだ。「口を開けさせろ！あいつは犬のような歯を持っていて、一口噛むだけでお前の心臓を食い尽くすぞ。」

「口を開けて。」松明を持った男が身を乗り出し、歯のガタガタの口を開けて見せた。「ああ。」弓兵の列はよく見ようと身を乗り出した。

しかし、ラザロは眉をひそめて彼らを一蹴しただけだった。

すると弓兵の一人が叫んだ。「彼から離れる！彼は君たちに呪いをかけるぞ。我々全員に疫病を蔓延させるに違いない！」

弓兵の主張に驚いたのか、松明を持った男はまるでラザロに噛まれたかのように振る舞い、逃げながら炎を彼に振り払った。兵士たちの武器が動き、おそらく安全な距離を保ったのだろう、彼はラザロを非難した。「我々は全能の神のしもべだ！お前たちの力は神の御前では封じられている！」彼は地面に唾を吐いた。男たちは再びぶつぶつ言いながら、慌てて十字架の印を体につけた。ラザロは松明を持った男の唾に目を落とし、彼らを無視した。

洞窟がなかったため、兵士たちは交代で頭を突っ込んで彼をじろじろと見ていた。
やがてラザロは、馬の蹄が手綱を叩く音と、その中に響く鎖の音を聞き取った。

くぐもった声が「どけ！道を空けろ！」と叫んだ。三人の男が囚人用の鎖を担いで洞窟に入ってくると、松明が波打つように灯った。ラザロは、一列に並んだクロスボウと共にゆっくりと立ち上がった。洞窟の中に入ると、彼らは鎖の山をラザロの前に洞窟の中央に下ろした。

騎士は兜を脇に抱えたまま前に進み出て、ラザルスに指示を与えた。

「この鉄枷はお前を縛るためのものだ。受け入れるか、その場で殺されるか、どちらかを選べ。さあ、選択を示せ。」焦燥に駆られた武器が動いた。

ラザロは答えた。「もし私が受け入れるなら、あなた方は私を悪魔として捕らえ、殺すでしょう。もし私が拒否するなら、あなた方は私が拒否したという理由で私を殺し、私を悪魔として殺すでしょう。」

騎士は反論した。「これらの命令は私のものではありません。この地の領主であるラングアナーズ伯爵、セリス・ダルシクール陛下からの命令です。陛下はあなたに謁見を求めています。陛下の前では拘束されることを承諾していただく場合に限りです。さらに、陛下はあなたに危害が及ばないように命じておられます。」

騎士はさらに近づき、おそらく彼の声はより真摯な嘆願の響きを帯びていた。「我が主は正義であり、その言葉は拘束力を持つ。」

彼はこう伝えてきた。「もし君が、君の能力の一つ、つまり簡単なことで彼を助けられるなら、君は自由に行かせてあげよう。」

「これは一体何の問題だ？」とラザロは尋ねた。

「陛下は何もおっしゃっておられません。しかし、今あなたとお話したいとお考えです。そのためなら、私たちがあなたをお引き止めさせていただいてもよろしいでしょうか？」

ラザロはナラムシンとキリストの貧しい男のことを語った。そして思い出すと、ナラムシンは議会の自由の約束を信じていたが、貧しい男は自分が本当に束縛されているとは思っていなかったという考えを信じていた。彼には、信仰が二人の命を奪ったように思えた。おそらく、二人とも自分自身にふさわしい敬意を払って信仰を貫かなかっただろう。しかし、ラザロは今、鎖の山の前に立っていた。おそらく、信仰以上のものが彼の運命を決定づける瞬間だった。そして、わずかな理性、山のような疑念、そして山のような

彼は信頼を寄せ、自らを卑下し、兵士たちが彼を鉄枷で縛ることを許した。

しかし、その数時間前、昼間でも、ラザロが洞窟の床で眠っていた時でさえ、悪魔捕獲の知らせは、まるで目もくらむような十字軍のように国中に広まり、その話は語り継がれるたびにますます荒唐無稽になっていった。数ある噂の最後は、サタンが洞窟で殺された司祭たちの心臓を吸い取っているところを発見され、百人もの人々が

彼を捕らえる前に、そして彼がこの地に大疫病を蔓延させるのを阻止する前に、多くの者が倒れた。

自由身分の者も年季奉公人も、兵士も聖職者も、女性も子供も、大勢がダルシクール城の門前に押し寄せた。多くの教皇の書記官が歴史を記録し、後世に正確に伝えるためにやって来た。そして星空の下、老いも若きも、貧富の差、善人も悪人も、皆が悪魔の王、悪魔を一目見ようと集まった。

サタン自身が、そのあらゆる悪行に対する罰を受けることになるように思えたかもしれない。創造物に対する行為。

【第13章終了】



この文学作品は

d専ら献身的に

エドガー・アラン・ポー (1809年 - 1849年)

—彼の遺志が私たち一人ひとりの心の中で生き続けることを願います—



~[GothicNovel.Org](https://www.gothicnovel.org)~